

最初の高等学校国語の授業で評論を学ぶ

—大岡信「言葉の力」を教材として—

金本宣保

1、授業のねらい

学校での最初の授業は、教師と生徒とが出会う場である。高等学校の国語の最初の授業は、高校で学ぶ国語とは、どういふものであるかを生徒に認識させるものである。教材は評論であろうと文学作品であろうとそこは同じであるが、評論教材の方が、主観的なものを直接表すことなく、解が進められるだけに、出会ったばかりの生徒に対しては、適当な教材であろう。

授業のねらいは次の三つである。

- (1) 国語の学習に興味を持つ。
- (2) 「言葉」への自覚を深める。
- (3) 評論文を読む力を養う。

教科書は、明治書院「精選国語I 二訂版」で、大岡信「言葉の力」は、その二番目の教材である。内容は、親しみやすく、また、深く読もうとすれば、どこまでも深めることができる。文章が平明であるのも最初の教材として適

当であると考えた。

以下一九九一年度高校一年A組の実践をもとに報告する。

2、授業の展開

〔 〕は主な学習活動

第1時 「言葉とは」何だろうかを考える。〔作文1〕

全文通読

第2時 「言葉」と「贈り物」の部分の読解

〔自分の体験を発表する〕

第3時 「今日のこの風景を君にあげよう」の理解

第4時 「古典」「傑作」の部分の読解

〔要旨をまとめる〕

第5時 図書室で本を選び読む

〔読書〕

第6時 本の紹介文を書く

〔作文2〕

第7時 大岡信と「古今集」について知る

〔要旨をまとめる〕

第8時 「ささやかな言葉」の部分の読解

〔氷山〕のたとえを図にかく

第9時 まとめ「言葉の力」から学んだこと〔作文3〕

計画においては、はじめの生徒が「言葉とは」何だろうかかと考えていたことから、「言葉の力」を読むことによつて、「言葉」について考えを深めたことを確かめることを、中心に考え、しかし、実際の一時間一時間は、まじめに合わせるのではなく、学習者には別々の内容として学んでいかにせるように工夫した。「言葉とは」という、言語を正面にすれば、結論は「大切だ」に決まっているだけに、授業においては、新鮮な気持ちで学習できるように、内容や学習活動に変化があるものと考えた。

第5・6時の、図書館で本を選び読み、紹介文を書く学習は、学校の図書室に親しませるとすることも意図したものであり、各クラスで5月の連休前の授業に、図書室で活動させた。全体の流れのなかでは、「言葉」を広い面からとらえさせようというねらいがあった。

3、「言葉とは」何だろうかを考える

教科書を開く前に、作文を書かせた。指導者が自己紹介をし、生徒の氏名を呼んで、すぐ、原稿用紙を配布して書かせた。

ねらい 言葉について自分の考え方を自覚させ、問題意識を持たせる。

板書 題「言葉とは」 百字 二十分

書き出しの文「言葉とは―である。」（自分の考え）その後で、その考えを説明する。

二十分後に、指名して作文を発表させた。授業で作文を書くこと、その作文を自分のものとして発表することに慣れさせる。「言葉とは」という題は、抽象的であつて型通りの答が出るといふ面もあるが、まだ、知り合つたばかりの級友のなかで、書いた文章を発表しやすいといふ面がある。とまどいもみられたが、生徒はそれぞれ書いて、指名されれば発表した。

生徒の作文で多く使われていた言葉は以下の通りである。（41人中）

「伝達」 「伝える」 28 「コミュニケーション」 10
「表現」 「表す」 10 「意思」 「意志」 15 「気持ち」 「感情」 15 「考え」 「思考」 10 「傷つける」 7
生徒の作文の例文 A

「言葉とは、人と人とのコミュニケーションを深めるものである。たとえば、自分の気持ちを伝えるの、他人の意見を知るのも言葉を媒介としていて、それなしでは互いに正確に伝えあうことができない。つまり、言葉は人

間社会を成り立たすための基盤となっているのである。」

4、評論文の内容を具体的なものとして理解する

評論の論旨をまとめることができても、内容は理解できているとは限らない。「言葉の力」において、大岡信は例を示しながら述べている。その例が、自分達の周りにあることとして思い当ることがなければ、文章の中でのことではない。類似した具体的な場面を生徒に考えさせた。

第2時で、「言葉」と「贈り物」について述べた文章を理解させるために、最近もらった贈り物を思い出させた、その具体的な場面と言われた言葉を発表させた。生徒から出たものは「お年玉」で言葉は「おめでとう、今年も……」という例、「入学祝い」と「おめでとう、がんばれ」という例が多かった。それで、その言葉を言われたときどう思ったかと問うと、「今年も……」とか、「がんばろう」とか思ってたかと思えた。「決まりきった言葉だけど、そこに新鮮で生きた気持ちがあった」と確認した。

第3時の恋という場での言葉については、若い男女の言葉のやりとりを思い描かせた。言葉は多くなく、他の人にとってはつまらない言葉が、二人にとっては、恋という空気のなかで浮かんで消えていくものだと言明した。

また、文章の中では理解することが困難と思われる部分を、指導者が物語化して説明した。

平安時代、和歌は贈り物であったというところで具体的な場面で述べた文章が、教科書が省略されている。それを、省略された文章を、そのまま読ませて補うのでなく、指導者が内容を物語にして話した。

第7時には、大岡信が「古今集」について述べた部分を学習した。本文では、はじめは「平凡な世界しかないように思われ」るが、精神の「構造を知ること」によって「にわか」に「古今集」というものがおもしろくなってくる。」と書いてある。学習者は、その結論を、結論として受けとめて分かったと思っている。大岡信にとって「古今集」というものがおもしろくなってきたのは、他人の解いた答を納得したということではなく、大岡信の体験だということとは理解できない。指導者が、大岡信「紀貫之」(筑摩書房 昭和四十六年発行)の「一なぜ貫之か」「四袖ひじてむすびし水の」「あとがき」などを中心にして、大岡信と「古今集」との出会いをやさしい物語にして説明した。「万葉集」が上で「古今集」が下であるという一般的評価のなかで、若いからということ、「紀貫之」の執筆が与えられたことが、大岡信に「古今集」を発見させ、それは、「古今集」の一般的評価を改めさせることになった、という大筋で話をした。正岡子規にも触れながら、単純化した物語で、大岡信にとっての事件、また、日本近代文学史上の事件が、ひそんでいることをうかがわせようとした。

評論の説解において、という場においてその評論が書か

れたか、ということを物語化して説明することは、一つの方法として考えられる。たとえば、石川啄木の歌や、正岡子規の作品が、作者の生涯の物語として理解されて親しまれているように、また、小説では、芥川龍之介や太宰治の作品が、作者の自殺と関連づけて読まれているように。これらの場合、作者の伝記的事実が作品を解明しているのではなく、作品から作者の生と死のイメージを読者がつくり上げていくのである、そうすることによって読み味わっている。評論文においても、筆者のイメージを描くことによって、なぜこう書くのかと考え、文章を生きたものとして味わうことができるであろう。

5、授業のまとめ

(1) 「言葉の力」の教科書の文章の後の文章を読むとして、面白いと感じた所を書いて提出させた。生徒が面白い所としてメモにあげたものは以下の通りであった。

言葉は「水山の一角」だ 11

「ヴェーダ」の言語は「四個の四分の一」 13

ノヴァーリス「見えるものは見えないものに」 17

コミュニケーションの否定 13

「私は今、静けさの中に聴きっています」 7

美しい言葉とは単語ではない 4

志村ふくみさんの話 桜の色 21

(2) 「言葉の力」から学んだこと

授業の結びとして、「言葉の力」を読み、学習したことを確認し、国語の学習に対する意欲を高めることをねらいとして、作文を書かせた。授業のはじめに書かせた作文を各自に返し、それと、学習した内容とを対比して考えさせ、作文を書かせた。

板書 題「言葉の力」を読んで学んだこと 四百字

一段 「はじめ言葉とは……だと考えていた。」

(作文1の引用あるいはまとめ)

二段 「大岡信『言葉の力』に……とあった。」

三段 自分の考え } それで 筆者の考えに近い

しかし } 筆者の考えに反対

生徒の作文で、三段「それで」で始めた者43人で、「しかし」で始めた者は4人であった。

生徒の作文の例B（1限の作文例Aの生徒のもの）

「私は初め言葉とは、人と人とのコミュニケーションのための手段であり、互いに正確に知るために必要だと考えていた。」

ところが大岡信「言葉の力」に「最も相手に伝えたい気持ちには簡単に伝わりにくい……誤解の余地がつねにあることのほうが、人間であるという条件に対しては忠実

な生き方だという気がする……言葉にはよくわからない部分があつていいのだ。」とあつた。

それで、改めて言葉の本質というものに気付いた。気持ちを表す言葉は自分の気持ちを伝える手段であるけれど、コミュニケーションの語が表すような「伝達」の手段とは違う。気持ちには、言葉ではあいまいにしか表現できないのだから、正確に「伝達」される必要はないのだ。だからこそ、そういう未完成な、ささやかな語の組み合わせによって、自分の内面を感じ取ってもらえる力を生み出す言葉の「力」は素晴らしいと思う。よくわからない部分をもつ言葉の力は、薄っぺらでない人間を、広がりを持つて表せるということにあるのだ。」

生徒の作文の例C

「はじめ、言葉とは「他人をいたわるやさしさになり、傷ついた人に対するやさしい言葉は、その人の心をいやすことができる。」と考えていた。

大岡信の「言葉の力」に「言葉は氷山の一角であり、氷山の側面にそれを発した人の心がかくされている。」とあつた。

それで、私は「やさしい言葉」が他人をいたわるやさしさや、傷ついた人の心をいやすものではなく、「やさしい言葉」の側面に隠された「やさしい心」こそがその様なものになるのだと思った。

こう考えると、発せられる言葉はささやかで、どうでもいい物に思われるけど、あくまでも心を運ぶのは言葉であり、言葉なくしては心がつたわりにくいということ忘れてはいけないと思つた。」

生徒の作文の例D（部分）

「組み合わせ方、発せられる時と場合というものを理解できない人間は、一生すごい力を持った言葉と関わりがなくなるといふことになる。しかし、それで不幸福になるというのではないのだから、言葉の力がすぐくなくなくていいと思う。」

生徒の作文の例E（部分）

「それで、私は言葉が直接相手に自分の気持ちを伝えるものだと思つていたが、大岡信の言うとおり、言葉は氷山の一角ではないかと思うようになった。

しかし、筆者の言うとおり、私たちは窓をのぞきながら相手の奥まで理解しようとたえず務めているだろうか。私には、言葉のうわつらしか見えなような気がする。相手の奥まででなく、手前までしかのぞけないような気がする。」

作文では、いずれの生徒も、その生徒なりに学んだことを書いている。「しかし」と、大岡信の考えに反対の意見

を述べている生徒にしても、筆者の考えを理解はしている。特に例文Eは、筆者の考えのようなことが現実に行われていないことを述べていて、むしろ筆者の考えを発展させたものである。

「くから学んだこと」というような課題は、どういう時でも適当だというのではなく、高校入学したばかりの授業であつたから、生徒は素直に書いたと思われる。一年間、その生徒達の国語の授業をして、これらの作文を読んでもみると、形を整えたという所はあるにしても、それぞれの生徒らしさ、個性につながっていくものがうかがわれる。

6、授業を終つて

最初の高等学校国語科の授業で「言葉の力」を教材として授業をし、考えたことは以下の通りである。

- (1) 高校の国語の授業に対する興味を持たせることに評論教材は適している。
- (2) 授業は、生徒と先生とが出会う場であり、国語の教室において生徒は思考を深めることを学習する。
- (3) 現代文の授業においては、特に疑問を持つていない状態から、「分からない」ということを自覚させ、問題意識を持たせる。そこから学習することによって「分かる。」それは学ぶ喜びにつながる。また、「分かる」ことは「まだ分からないことがある」ことにつな

がり、それを学びたいという意欲になるものであることが願われる。

- (4) 高等学校国語の評論教材の学習課題と、最終の段階まで考えると、文章をより一般化した形で理解する学習が必要である。抽象度の高い言葉を自分のものとして理解する力が育てられなくてはならない。

(5) 教材の面から述べると、精読する教材と発展のための教材とを区別し、発展教材は精読した学習を理解していれば一読して要点は読み取ることのできる文章をとりあげた。精読では新鮮な問いから読みを深め、発展教材で新鮮な内容を知り興味を広げていくことをねらい、学習者も指導者も新鮮な気持ちで文章を読むことができるように心がけた。

一九九一年度の高校一年の現代文の授業で学習した教科書以外の主な教材は以下のようなものである。

- 「城の崎にて」志賀直哉と関連して 伊藤整「改訂 文学入門」(第八章 下降認識と上昇認識) から
夏休みの読書から アレッササンドロ・マンゾーニ著 川祐弘訳「いいなづけー17世紀ミラーノの物語」河出書房新社から
「日常性の壁」安部公房と関連して 安部公房小説「棒」、エッセイ
「鳥と名と」唐本順三と関連して 伊藤静雄詩集「夏花」から

冬休みの読書から ミルチア・エリアーデ著 島田裕巳・

柴田史子訳「世界宗教史Ⅱ ゴータマ・ブツダからキリスト教の興隆まで」筑摩書房から D・ハルバースタム著 浅野輔訳「ネクストセンチュリー」TBSブルタニカより

「日本文化の雑種性」加藤周一と関連して 「日本文化の雑種性」後半部分、「統 羊の歌」から

一九九二年度高等学校二年では、教科書教材との関連でなく、教科書以外の文章で単元を構成する授業を実施した。三年生になれば、そういう授業がより多くなるであろう。

(広島大学附属福山中・高等学校教諭)